

平成28年度富山県公文書館企画展

とやまの観光 むかし・いま

開催
期間

平成28年 会期中は10月30日(日)を除き土日も開館

9月29日(木)～11月3日(木)

入場
無料

開館
時間

9:00～17:00



◀「立山へ・部分」
(北野家文書・富山県公文書館蔵)

▶「鉄道旅行案内・部分」
(枡田家文書・富山県公文書館寄託)

目次

開催にあたって	1
はじめに	2
一 江戸時代の旅	2
寺社参詣・湯治の楽しみ	
紀行文にみる越中の旅	
近世越中の名所	
立山禅定登山と立山温泉	
二 近代にみる観光の幕開け	6
近代登山のはじまり	
立山に魅せられた人々	
鉄道網の発達と富直線の開通	
富山県主催 一府八県連合共進会・日満産業大博覧会	
日本新八景とその影響	
富山県下理想的避暑地	
三 戦後の観光産業の発展	10
戦後復興と博覧会	
高速道路網の発達	
立山黒部アルペンルートの開通	
観光開発と自然保護	
富山県総合開発計画と観光行政	
新たな博覧会と観光キャンペーン	
四 これからの富山の観光	13
おわりに	14
◇主要参考文献	14
◇関連年表	15
◇企画展史資料一覧	16
◇富山名所(全12枚)	17

開催にあたって

人は旅に何を求めるのでしょうか。江戸時代は、寺社参詣や湯治、物見遊山の旅が盛んでした。明治になり、道路・鉄道網が整備されると、旅行がブームとなり、各地に観光名所が登場しました。

富山県でも大正二年（一九一三）に富直線（富山―直江津間）の完成により北陸線が全通して首都圏と直結したのを機に、一府八県連合共進会を開催し、名所旧跡や富山の良さを県外にアピールしました。当時の人々は、新聞や名所案内、地図、絵葉書などから情報を集め、全国的景勝地から身近な避暑地にいたるまで、幅広く観光に関心を持っていました。戦後は、経済復興・高度経済成長が進む中、自然保護に配慮しつつ立山黒部アルペンルートを開通させるなど、富山の観光は常に時代の中で変化を遂げてきました。北陸新幹線開業一周年を迎えた今、さらなる発展が期待されています。

今回の企画展では、当館所蔵の史資料をもとに、人々が旅や観光をどうとらえ、憧れや関心を寄せたのか、そして、観光がどのように盛んになっていったのかを紹介します。富山の「むかし」と「いま」を知ること、ふるさとへの愛着が深まり、今後の活力・魅力あふれる富山を考える機会としていただければ幸いです。

今回の企画展を開催するにあたり、多くの方々や機関からご協力を賜りました。また、富山近代史研究会の研究成果に多くの示唆を得ました。ここにご芳名を記して感謝の意を表します。

国立公文書館 富山県立図書館 富山市郷土博物館 富山市売薬資料館

入善町教育委員会 入善町立図書館 富山県観光・地域振興局観光課 公益社団法人とやま観光推進機構

富山地方鉄道株式会社 富山近代史研究会

荒木宏（小矢部市） 石井孝明（富山市） 海内宏憲（富山市） 北野洋子（富山市） 高田光雄（富山市）

広野リツ（富山市） 柘田譜三（上市町） 河尻裕巳（岐阜県） 佐伯敬之（千葉県）

（順不同敬称略）

平成二十八年九月

富山県公文書館

はじめに

人は、旅に何を求めるのだろうか。旅に出ると、日常とは異なる未知の世界が広がる。訪れた地での人との出会い、自然とのふれあい、歴史や文化との出会いがあり、新しい事実や新たな自己を発見することがある。それが刺激となつて、心や生活を豊かにすることにもつながる。旅行・観光の魅力はそうしたところにあるのではないだろうか。

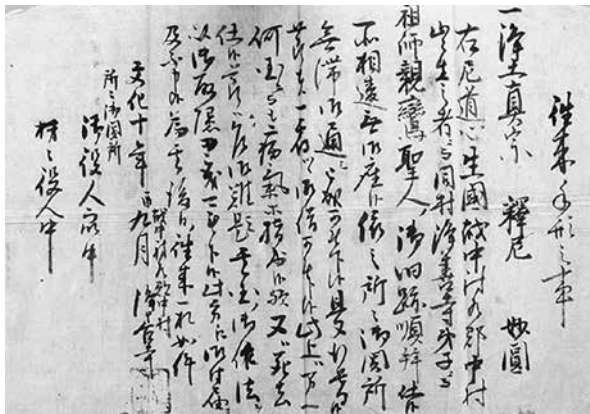
富山県でも今日、いわゆる「観光」ブームの中で、内外からの観光客誘致の方策としてのインフラ整備、新たな地域開発、「おもてなしの心」(ホスピタリティ)の育成が求められている。北陸新幹線開業を契機に、「観光立県」をめざした様々な取り組みが行われている。今回の展示では、近世から近代、そして現代にいたるふるさと富山の歴史を、旅や観光を切り口に「江戸時代の旅」、「近代にみる観光の幕開け」、「戦後の観光産業の発展」、「これからの富山の観光」の四期に分けて紹介したい。

一 江戸時代の旅

寺社参詣

庶民の旅として代表的なものに寺社参詣があつた。寺社参詣は、篤い信仰心に駆られて聖地や開祖ゆかりの地を訪れることであるが、実際には物見遊山的なものも多かった。伊勢神宮や善光寺・身延山参詣などの他、浄土真宗がさかんな越中では、京都の東・西本願寺や浄土真宗の開祖親鸞・中興の祖蓮如の旧跡巡り・二十四輩の巡(順)拝が身近な寺社参詣だつた。

二十四輩とは、浄土真宗の開祖親鸞の高弟二十四人をさす。そのゆかりの寺院に参拝することを二十四輩巡拝といつた。江戸時代には、街道や宿場が整備され、経済や治安の向上を反映し、庶民にとって旅は身近なものになつたが、他所への移動は制限されていた。そのため、巡拝の旅には「往来手形(往来一札)」と「関所手形」の二つの証明書が必要であつた。中でも「往来手形」は、旦那寺、村(町)役人などが身元保証人となり発行する身分証明書で、旅の間は携行し、不慮の事故などの際に身分証として提示した。その内容は、旅の目的・宗旨・住所・名前・年齢などとともに、旅先で死亡した際には当地の方法で葬つてほしいとの旨などを記すものであつた。



「往来手形之事」(広野家文書 富山県公文書館蔵)

往来手形之事

一 浄土真宗 釋尼 妙圓
右尼道心、生国越中射水郡中村
出生之者二而同村浄善寺弟子二而
祖師親鸞聖人ノ御旧跡順拝仕候
所相違無御座候、依之所々御関所
無滞御通シ被成可被下候、且又行暮候
節者一宿ツ、御借可被下候、此上八万
何国二而も病氣等指出候狀、又ハ死去
仕候節ハ、乍御難題其国ノ御作法ヲ
以御取隠被成可被下候、此方江御付届ニハ
及不申候、為其後日ノ往来一札如件

越中射水郡中村 浄善寺(印)
文化十年西九月
所々御関所
御役人衆中
村々役人中

『二十四輩順拝図会』にみる越中の寺院は、次の十二の寺院であった。

(寺院名) (開基)

- ・善徳寺 本願寺第8世蓮如上人
- ・超願寺 親鸞聖人の弟子、性信上人
- ・瑞泉寺 後小松天皇勅願所、本願寺第5世綽如上人
- ・報恩寺 親鸞聖人の弟子、性信上人
- ・勝興寺 実如上人
- ・東弘寺 親鸞聖人の高弟、善性上人
- ・極性寺 親鸞聖人越後下向時ゆかりの寺院
- ・持専寺 親鸞聖人越後下向時ゆかりの寺院
- ・願海寺 親鸞聖人の直弟、願海坊真性
- ・極成寺 親鸞聖人ゆかりの寺院
- ・徳法寺 親鸞聖人越後下向時に帰依した
源左衛門の子孫
- ・浄永寺 斎藤別当実盛の孫、永井源蔵が親鸞聖人に帰依

湯治の楽しみ

江戸時代の庶民は、厳しい暮らしの中でも非日常や癒しを求めて、物見遊山や湯治の旅にも出かけた。この頃の湯治は、五月あがり(田植え後)の骨休めなどに、米・野菜など食料持参で近くの温泉に出かけ、長逗留をするのが普通だった。江戸時代の越中国における代表的な温泉地は立山下温泉、小川温泉、山田温泉、鐘釣温泉、黒薙温泉、大牧温泉などであった。中でも立山下温泉は、佐々成政が「ザラ峠越え」の際に入湯した伝説をもつ。既に元禄七年(一六九四)に四百人も湯治客がいたとされる。文化十一年

(一八一四)、それまで

は常願寺川右岸の立山参詣道から湯元に下る険しい道しかなかったが、常願寺川左岸からの道が新たに開かれ往来が便利になった。そのため湯治客がどんどん増え、同年には九千五百人、文政七年(一八二四)には一万三千人を超える利用者が出たという。湯の効能は、元禄七年(一六九四)に「疝氣によし」、元文二年(一七三七)には、打疵・切傷・中風・筋痛・淋病・しよかち・癩病等を治すとされていた。

湯治客はこうした効用の情報を得、各地の温泉に湯治に出かけた。

そのために、温泉番付などが用いられた。代表的なものが「諸国温泉功能鑑」である。相撲の番付にない東西に分けて全国の人気のある温泉を示したもので、温泉の所在や効能を知る手引書として江戸中期から後期にかけて流行した。明治末期までは各地で盛んに出版されていたが、大正期以降は次第に出版されなくなった。近代に入り、全国各地の温泉に関する交通・効能・旅館などの情報を一冊にまとめた「温泉ガイドブック」が登場する中で、その役目は終焉したといえる。



「黒薙温泉図会」(富山県立図書館蔵)

コラム「小川温泉日記」にみる黒薙温泉への旅

射水郡中老田村(現、富山市)の肝煎であった海内狐山(久五郎)が、小川温泉に湯治に行った際の記録「小川温泉日記」には、黒部奥山の黒薙温泉への道程も書かれている。黒薙温泉の開湯を加賀藩が正式に認めたのは、慶応三年(一八六七)ないし慶応四年であるとされる。日記によれば、狐山は、慶応元年に黒薙温泉に赴いている。黒部奥山は厳しい藩の管理下にあつたが、実際には、風光明媚で効能の高い黒薙温泉に、近隣や富山からも人々が休息、癒しを求めて訪れ、入湯していたことがわかる興味深い史料である。

紀行文にみる越中の旅

越中には富士山・白山と並び日本三霊山の一つとして知られた立山をはじめ、『万葉集』の歌枕も数多くある。江戸時代には、室鳩巢、高山彦九郎、橋南谿、頼三樹三郎をはじめ多くの文人が越中を訪れ、詩歌や書画を残し、紀行文を著した。その中には、滑稽本作者十返舎一九や俳聖松尾芭蕉もいた。十返舎一九は、『越中参詣立山記行方言修行金草鞋』、松尾芭蕉は、『おくのほそ道』の中で越中の名所旧跡や歌枕を描いている。ここでは両作品から越中でたどった行程を見てみたい。

①『金草鞋』の行程

越後国 越中国

一振(市振)↓堺(境川)↓泊↓三日市↓魚津↓滑川↓水橋↓神通川舟橋
↓富山↓岩嶮↓横江↓血掛(千垣)↓芦嶮↓湯川↓美女杉↓伏拝↓桑谷↓

中津原↓国見坂↓一谷大鎖↓室堂↓絶頂本社(雄山神社本殿)↓別山↓
富山↓小杉↓高岡↓森山(守山)↓氷見↓荒山峠↓石動↓俱利伽羅峠↓金沢
十返舎一九は、立山登拝の地だけでなく、黒部の相本橋(愛本橋)や神通
川の舟橋など多くの越中の珍しい景観を洒脱に描いている。

②『おくのほそ道』の行程

越後一振(市振)↓黒部四十八ヶ瀬↓滑川(宿泊)↓放生津↓高岡(宿泊)
↓俱利伽羅峠↓金沢

芭蕉は、越中では万葉の歌枕を訪れることを目的としていたが、連日の猛暑などで気色すぐれず、氷見の「田子浦の藤波」などを見ることはできなかつた。しかし、この旅の中で「早稲の香や 分け入る右は 有磯海」の句を詠んでいる。

近世越中の名所

江戸時代、街道は整備されたものの、多くの急流河川が越中の交通を妨げた。常設の橋としては富山の舟橋、黒部川の愛本橋、立山の藤橋があるだけで、多くの河川では、政治的・軍事的理由の他、財政的・技術的理由から、舟による渡し、徒歩による徒歩渡、人足が両脇を持ち竹竿につかまって渡る竿越が利用された。また、飛騨街道や五箇山街道では籠の渡しなどで川を渡らねばならなかった。しかし、その様子も名所の一つとなった。

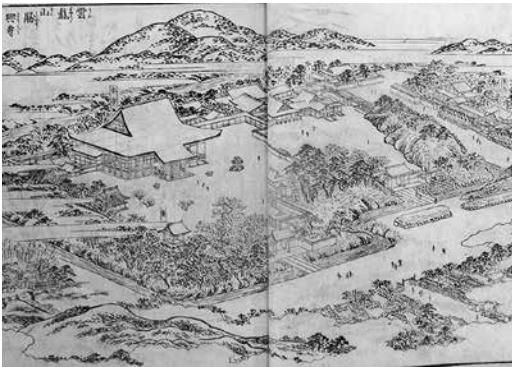


明治初期の愛本橋(個人蔵)

また、名所図会などにも越中の霊山立山の他、瑞泉寺や勝興寺などの寺院、珍しい景観、越中万葉の故地を含めた様々な名所旧跡が紹介されているが、次のような例が越中の名所としてあげられている。

(例)

- ・「五箇山籠の渡し」
- ・「天柱石」
- ・「奈古の海」
- ・「奈古の浦」
- ・「古国府の湊」
- ・「布施湖」
- ・「二上山」
- ・「越中青城山」
- ・「黒部川」
- ・「愛本の橋」
- ・「神通川船橋」
- ・「小川温泉」
- ・「大岩山日石寺」
- ・「瑞泉寺」
- ・「勝興寺」
- ・「越中滑川の大蛸」
- ・「蜃気楼」など



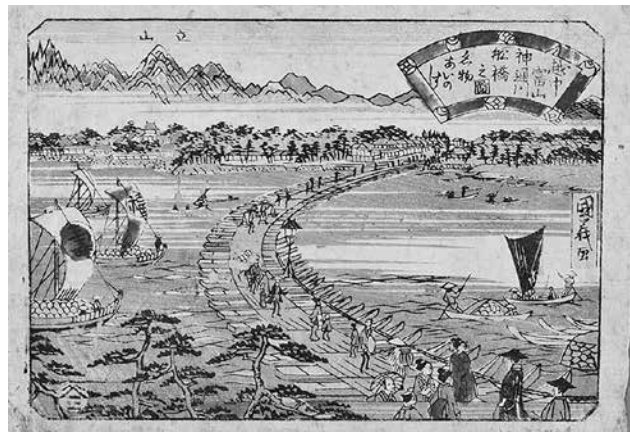
(勝興寺『二十四輩順拝図会』佐伯家文書より)



「越中五箇山(籠渡し)」(富山市郷土博物館蔵)

コラム — 神通川名物「あゆのすし」から「ますのすし」へ

江戸時代、神通川で獲れる鮎あゆの鮓すしは美味で知られ、十返舎一九の『かほの草鞋』にも登場している。また、ますのすしの起源は、享保二年(一七一七)料理が得意であった富山藩士吉村新八が、三代富山藩主前田利興に献じた「鮎ずし」だと言われている。前田利興はこれが大変気に入り、新八に鱒・鮎のすし漬役を命じ、時の八代將軍徳川吉宗に献上したところ絶賛され、富山の献上品として名物になった。現在のままのすしは、こうした伝統を受け継ぎ、富山を代表する名産品として全国的に知られている。



「越中富山神通川船橋之図、名物あいのすし」
(富山市売薬資料館蔵)

立山禅定登山と立山温泉

古来、立山は神の山として畏敬されてきた。平安時代初期には、浄土信仰の広まりとともに神々の支配する立山に仏教徒が入山するようになり、立山山頂は阿弥陀如来の来迎するところと考えられるようになった。こうした極楽浄土への往生を求めて登山することを禅定登山ぜんじょうという。立山山麓の岩嶮・芦峯両寺の門前にはこうした人々のための宿坊が発達した。

また、佐々成政が「ザラ峠越え」の際に入湯した伝承をもつ立山温泉は、胃腸病に効く名湯として江戸時代から賑わっていた。この温泉は、江戸時代から明治・大正・昭和の時代まで立山登山客や砂防工事に携わった人々を癒してきたが、戦後、昭和四十四年（一九六九）の水害で被災し、その後、廃業することとなった。

二 近代にみる観光の幕開け

近代登山のはじまり

江戸時代、加賀藩は奥山廻り役を設けて立山山中の取り締まりを行った。これは、樹木の盗伐を取り締まるため、また、山越えによる他領との交流を警戒するためであった。

明治時代になり、加賀藩の治世と厳しい自然によって閉ざされていた越中と信州を結ぶ山越えの道を開くことが目指された。これが立山新道である。

〔立山新道の開削〕

- ・ 明治初年、開通社により開削された日本初の有料道路
- ・ 越中原村（現、富山市）↓立山温泉↓針ノ木峠↓信州野口村（現、長野県大町市）を結ぶ
- ・ 明治十年（一八七七）頃、ほぼ通行可能になったが、莫大な維持管理費用もかかり、明治十五年（一八八二）には廃道。

この道は、外国人にも利用され、彼らはこの立山新道を利用して登山し、立山や立山カルデラ周辺の雄大な自然や文化を詳細な紀行文で紹介した。こうして立山は、山岳観光地としても海外にも知られることになった。立山新

道は、開通後数年で廃道となった幻の道であったが、この新道は、コースの相違はあるものの、昭和四十六年（一九七二）に「立山黒部アルペンルート」として結実する事業の先駆けになったといえる。

外国人登山年表

人名	年号	西暦	内容
ガウランド(英) デュロン(英)	明治八年	一八七五	外国人初の立山登山 信州側から立山新道を利用 ガウランドは「日本アルプス」命名者
アーネスト・サトウ (英)	明治一一年	一八七八	信州から針ノ木峠越え、立山温泉泊 悪天候のため立山登山断念
アトキンソン(英)	明治一二年	一八七九	富山側から立山登山。信州側に下山
ウエストン(英)	明治一六年	一八九三	信州から針ノ木峠越え、立山温泉泊 翌日立山登山。富山側へ下山 (大正三年には逆コースで登山)

また、元来立山は、神の山として信仰の対象であったが、こうした外国人による登山を契機に信仰や生業や職業のためではなく、山を登る行為そのものを楽しむ、価値を見出す近代的登山が始まったといえる。それは、探検からスポーツ・レクリエーションとしての登山の普及、さらに観光としての登山の道が開かれる道程でもあった。

立山に魅せられた人々

明治時代以降、新たに外国人だけでなく、明治五年（一八七二）に女人禁制の太政官布告が出されたことにより、女性にも立山登山の道が拓かれた。また、大正時代以降、皇族も来県時にしばしば立山登山を行なった。

女性登山年表

人名	年号	西暦	内容
深見 チエ	明治6年	1873	女性初の立山登頂、立山温泉経営者深見六郎右衛門（十二代目）の妻
ヤコバ（蘭）	明治24年	1891	立山登頂 オランダ人技師である父、ヨハネス＝デ＝レイケの通訳 内務省、県庁の役人も同行し立山登頂
富山女子師範学校・県立富山高等女学校の生徒	大正8年	1919	初の女性団体（48名）による立山登山

皇族登山年表

人名	年号	西暦	内容
東久邇宮稔彦王	大正8年	1919	皇族最初の立山登山（7月）、帰りに立山温泉泊
朝香宮鳩彦王	大正10年	1921	信州より入山。針ノ木峠越え、立山、劔岳登頂
秩父宮雍仁親王	大正13年	1924	皇族最初の積雪期登山（5月） ブナ坂からスキー登山 峰々をスキー、アイゼンで踏破
竹田宮恒徳王・北白川宮永久王	大正15年	1926	劔岳、立山登頂。針ノ木峠越えて下山

このように立山は次第に富山県の代表的山岳観光地として、ひろく周知されるようになっていった。

一方、小杉復堂、浅地倫、山田孝雄、井上江花、大井冷光、田部重治、吉沢庄作、冠松次郎などの文人やジャーナリストも、書物や新聞紙上で立山・黒部峡谷などの魅力を広く世に紹介した。

例えば井上江花は「精神を修養するには黒部国有林に優る学校はない」と述べ、自ら足を踏み入れた黒部峡谷の厳しさとともに、その魅力を伝えた。また彼と師弟関係にあった大井冷光は、幼いころからの憧れであった立山に



「黒部峡谷 新鐘釣温泉場の景」
(富山市郷土博物館蔵)

登頂したことをきっかけに、資料を集め『立山案内』を編集したが、それは歴史・伝承から自然系の地質・植物まで含む総合案内書ともいべきものであった。

こうした立山・黒部をはじめ、富山の自然・文化や、そこに生きる人々の魅力を伝える数々の著作は、後の富山の観光啓発に大きな役割を果たしたといえよう。

さらにこの後、昭和六年（一九三一）

に制定された国立公園法にもとづき、富山・長野・岐阜・新潟にまたがる山岳地域が、昭和九年（一九三四）に中部山岳国立公園の指定を受けた。このことも観光を目的とした入山者の増加の大きな要因となっていく。

鉄道網の発達と富直線の開通

鉄道整備事業は、輸送の利便性を高めるだけでなく、富山県の発展を他の地域にアピールする契機ともなった。

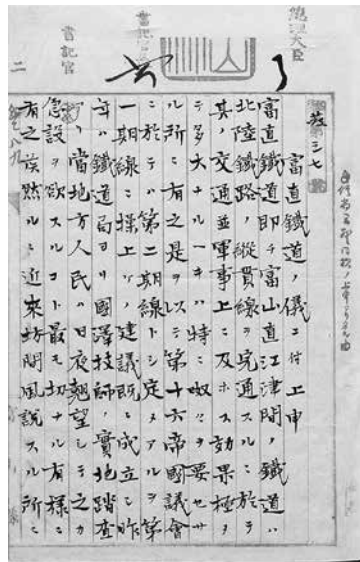
日本海側で初めて開通した民営鉄道は、中越鉄道であった。明治二十八年（一八九五）、高岡から砺波平野を南下して城端に至る路線として認可され、明治三十年に高岡―福野、翌明治三十一年に高岡―城端間が開通した。その後、明治三十三年には高岡―伏木間も開通した。

また、県東部で初めて建設された私設鉄道が、立山軽便鉄道であった。明治四十三年（一九一〇）制定の「軽便鉄道法」にもとづき建設が開始され、

翌明治四十四年、中新川軽便鉄道として申請許可され、大正二年（一九一三）に滑川―五百石間が開通、さらに大正十年（一九二二）には、五百石―立山間（現・岩嶺寺）に延伸した。

こうした中で特に県内に大きな影響を与えたのが、北陸線（富直線）の開通であった。明治二十五年（一八九二）、政府は「鉄道敷設法」を公布、翌二十六年より官営で

の北陸線建設（敦賀―富山間の工事）が開始された。明治三十二年（一八九九）に高岡―富山間が開通し、富山駅は桜谷村田刈屋（現、富山市）に創設された。これを受けて、翌明治三十三年に「関西二府十五県連合共進会」が開催された。その後、明治三十六年に、富直線早期着工を求める李家隆介知事の上申書が政府に提出され、明治三十九年、「鉄道敷設法中改正加除」（法律第十四号）により富直線建設が決定した。明治四十一年に富山―魚津間が開通、富山駅は現在の富山市牛島の地に移転した。そして、大正二年（一九一三）に富直線（富山―直江津間）がようやく開通し、北陸線（米原―直江津間）が全通して富山県は関東圏とつながることになった。この年に開催されたのが「一府八県連合共進会」である。



「富山県知事稟申富直鉄道ノ儀ニ関スル件」
（公文類纂 国立公文書館蔵）

富山県主催 一府八県連合共進会

大正二年（一九一三）年に、県立女学校（現・富山いずみ高校）を主会場

に開催され、共進会の第二会場であった魚津では水族館が開館した。この共進会は浜田恒之助知事のもと、大正元年の伏木港修築完成、同二年の北陸線全通（富直線の完成）を富山県発展の機会ととらえ、県内外にアピールするために開催された。参加した府県は、東京府と新潟・栃木・群馬・岐阜・石川・福井・滋賀の七県で、入場者は七二万六千人であった。

この共進会を契機に、富山駅から堀川村の会場まで富山電気軌道が開業され、富山市の交通基盤が一層整備された。また、県東部・西部、北陸各県との交流が深まり、関西から関東甲信越地方まで交流圏が拡大した。さらに様々な案内書や絵葉書なども発行され、富山県の名所旧跡、景勝地なども広く紹介する機会となった。

日滿産業大博覧会

昭和十一年（一九三六）富山市主催により、富山電気ビルディング・富山県庁などが建てられた神通川廃川埋め立て地で「日滿産業大博覧会」が開催された。昭和七年の満州国建設や朝鮮半島への直通航路開設を背景に、日本海対岸同士が手を結び、新たな日本海外交圏を樹立するという産業発展への期待がこめられた博覧会であった。本館・日滿記念館・観光館・電気と工業の館・売薬振興館・



「日滿産業大博覧会」の絵葉書
（富山市郷土博物館蔵）

富山県館などの展示場、野外ステージなどが設けられ、入場者は九一万三〇三〇人（当時の県人口は八三万四一七七人）を数える活況を呈した。また、この時も博覧会ポスター、パンフレット、絵葉書などにより富山の名所旧跡・景勝地が県内外にアピールされた。

また、この博覧会にあわせて、富山市営軌道の市内循環線が開通し、県内初の市内観光遊覧バスも運行された。

日本新八景とその影響

昭和二年（一九二七）、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社主催、鉄道省後援で景勝地の人気投票「日本新八景」が選定された。これは、鉄道省公認による「昭和の新時代を代表すべき新日本の景勝」を選定するという企画であった。平原・湖沼・瀑布・溪谷・河川・海岸・山岳・温泉の八部門において、「葉書一枚につき一票」というルールで一般投票により十位以内を決定、その後審査委員の推薦で二次審査を実施し、最終的に審査委員の協議により、「八景」「二十五勝」「百景」を決定するというものであった。

この企画は、国立公園の制定の時期とも近く、総人口が六千万人であった当時、四月十日から五月二十日までの期間に、総投票数が九千三百万票余を超える熱狂的イベントとなった。八景には、狩勝峠（平原）、十和田湖、華



観光客はじめ多くの人々が宿泊した富山ホテル
(富山市郷土博物館蔵)

厳滝、上高地、木曾川、室戸岬、雲仙岳、別府温泉がそれぞれ選ばれた。

富山県においてもこのイベントは、大きな盛り上がりを見せた。投票期間の序盤から中盤にかけて、組織票とみられる投票により、黒部峡谷・小川温泉・宇奈月温泉・立野ヶ原は、各部門でトップ一〇入りした。多くはその後、脱落していったが、その中で黒部峡谷だけは「黒部峡谷入選期成同盟会」の熱心な活動により八二万票余を集め、八位と奮闘した。当時の富山県人口は約七五万人であり、それを上回る投票数であったことになる。また、地元の有力者らが積極的に支援しており、郷土愛の現れをみることができ、最終的に黒部峡谷は、立山とともに「二十五勝」に選定された。

富山県下理想的避暑地

富山県でも「日本新八景」選定の全国的盛り上がりの影響を受け、昭和二年（一九二七）六月十八日から七月二十七日までを投票期間として、富山新報社による「県下理想的避暑地」選定が企画された。この企画は、県内の温泉・遊園地・滝・海水浴場・鉱泉から一般投票で選ぶというものであった。入選したのは以下の通りであった。



『富山県下理想的避暑地』第1位 生地鉱泉
(富山県立図書館蔵)

生地鉱泉（二位）、東岩瀬海水浴場（二位）、八木山の滝（三位）、高熊鉱泉（四位）、笹津遊園地（五位）、城端ラジウム鉱泉（六位）、湯谷温泉（七位）、雨晴（八位）、小川温泉（九位）、放生津ガメ島（十位）。

投票合戦は、終盤に抜出した生地鉱泉が逃げ切った。『富山新報』によれば、各地で協議会や後援会が立ち上げられ、組織票が勝負を決めたといえる。

昭和初期の旅行ブームの中で、避暑地・レジャー施設が選定対象とされたこと、余暇を楽しむ機運が生まれ、人気投票を契機に郷土愛（ローカリズム）が醸成された状況をうかがい知ることができる。

三 戦後の観光産業の発展

戦後復興と博覧会

富山県では、戦争により大きな被害を受けた県内の諸産業や県民生活をいち早く復興させ、発展させることを目的として、昭和二十年代に高岡市と富山市で産業博覧会が開催された。

まず昭和二十六年（一九五一）に「高岡産業博覧会」（会期、四月五日～五月二十五日）が高岡古城公園で開催された。北陸初のテレビジョン館・貿易館・電源館などが設けられた。会場として高岡市美術館（現、高岡市立博物館）が新築され、高岡市および県西部地域の観光宣伝効果も大きかった。

次いで、昭和二十九年に「富山産業大博覧会」が富山城址公園・魚津水族館（会期、四月十二日～六月四日）で開催された。これにあわせて、富山市庁舎・富山市公会堂が新築された。博覧会のシンボルとして建設された富山城（現・富山市郷土博物館）では、会期中「美の殿堂」として美術展や展覧

会が開催された。これらの博覧会は、富山県の戦後復興のシンボルであり、富山県の豊かな電力やくすりなどをテーマに郷土産業の発展が紹介された。

博覧会ブームの時代の中で、新聞や雑誌広告、ポスター、パンフレット、リーフレット、絵葉書など様々なメディアを通して県内外にアピールし、戦後の富山県の産業や生活に活気をもたらした。

高速道路網の発達

昭和三十年代後半以降、富山県では自動車の普及が進み、鉄道などの公共交通機関の衰退が深刻となった。その一方、全国水準を上回る急速なモータリゼーション化の中で、輸送手段としての高速道路網が整備されていった。これらの計画実現には長期間を要したが、これにより関西・首都圏・中京圏と直結し、物流のみならず、人の流れが促進され、観光客の流入にもつながっている。

昭和三十六年（一九六一）北陸自動車道の建設決定

昭和四十四年（一九六九）富山県内での着工（砺波インター付近）

昭和四十八年（一九七三）小杉―砺波間開通

昭和五十五年（一九八〇）富山―米原間開通↓太平洋側と直結

富山―滑川間開通



「観光の富山」の絵葉書（富山市郷土博物館蔵）

昭和六十三年（一九八八）北陸自動車道全線開通↓県内全線約一〇〇km貫通
平成二十年（二〇〇八）東海北陸自動車道全線開通↓名古屋と直結

立山黒部アルペンルートの開通

立山山岳観光開発は、昭和二十七年（一九五二）に富山県が総合開発計画の中で、立山開発の基本計画を策定したことに始まる。また、同年、富山地方鉄道（株）社長の佐伯宗義が中心となって立山開発鉄道（株）を設立し、準備体制に入った。昭和三十四年吉田実知事は、立山貫通道路の建設を核とした「山の夢」を発表し、立山観光開発は官民一体となって本格化した。

昭和二十七年（一九五二）立山開発の基本方針策定 高辻武邦知事

立山開発鉄道（株）設立 社長佐伯宗義

昭和二十九年（一九五四）立山ケーブルカー開通（千寿ヶ原―美女平間）

昭和三十一年（一九五六）弥陀ヶ原ホテル営業開始

昭和三十三年（一九五八）弥陀ヶ原まで登山バス開通、大町トンネル開通

昭和三十八年（一九六三）黒部第四発電所・黒部ダム完成

昭和三十九年（一九六四）室堂平まで登山バス開通

立山黒部貫光（株）設立 社長佐伯宗義

昭和四十三年（一九六八）映画「黒部の太陽」公開

昭和四十四年（一九六九）立山トンネル貫通

昭和四十六年（一九七二）立山黒部アルペンルート全線開通

この事業は、総工費八七億円、延べ五六万人もの労力を費やした一大観光開発産業事業であった。こうして、弥陀ヶ原の大高原、みくりが池、地獄谷、北アルプスの山容、大峡谷と巨大なダムなど周辺の大パノラマを楽しみなが

ら約四時間で富山市から長野県の大町市に達することができるようになった。

観光開発と自然保護

昭和二十年代から始まった大規模な立山観光開発により、昭和三十三年（一九五八）には自動車道が弥陀ヶ原まで開通し、立山日帰り登山が可能になった。昭和三十九年には室堂まで開通し、立山、みくりが池、地獄谷周辺にも容易に足を延ばせるようになった。こうして立山一帯は、年間百万人以上の人々が訪れる全国有数の山岳観光地となった。

一方、アルペンルート建設に際し、自然環境の調査と提言を行うため、「富山県自然保護協会」が設立された。また、ルート建設の途中で、工事や観光客がもたらす動植物生育環境の悪化、車の排気ガス、宿泊施設の汚水など深刻な環境問題が発生した。黒部峡谷の環境破壊や立山高原の環境汚染の問題では、学者・学生・山岳関係者なども加わり、規制の必要性を強く訴えた。そして、三万人余りの反対署名を集め、マイカーの乗り入れ禁止などを求めて富山県や環境庁に要請し、実現にこぎつけた。このように、自然保護団体をはじめ富山の自然を愛する人々の強い思いにより、自然環境の保護が図られていった。

昭和三十七年（一九六二）「富山県自然保護協会」設立

・立山黒部アルペンルート建設への自然環境の

調査・提言

昭和四十六年（一九七二）「立山連峰の自然を守る会」発足

会長植木忠夫

・立山へのマイカー乗り入れ禁止を県や環境庁に

提言

・雷鳥保護（雷鳥研究会と協力）

・ブナ林保護の基礎調査、自然観察遊歩道の整備

昭和四十七年（一九七二） 富山県、自然保護室（後、自然保護課）設置

昭和四十九年（一九七四） 自然解説員（ナチュラリスト）制度発足

解説員の養成、立山など四地区に配置

昭和五十一年（一九七六） 立山自然保護センターを室堂に設置

その他、各種団体による立山美化奉仕ボランティアなど、立山の自然環境を守る活動が今日に至るまで積極的に行われている。

コラム ― 加賀藩主と雷鳥

加賀藩五代藩主前田綱紀は動植物の研究にも造詣が深く、しばしば領民に命じて珍鳥を集めさせたが、雷鳥は捕えさせなかった。立山・白山で雷鳥を見かけた領民を集めてその生姿、形態を問いただし、絵師に命じてスケッチさせた。十代藩主治脩はるなぶも、絵師を登山させて立山の雷鳥をスケッチさせただけで捕えなかったという。現在、特別天然記念物に指定されている雷鳥ライチョウは、古くから霊山に住む霊鳥として保護の対象であり、今日の雷鳥保護の活動につながっている。



富山県総合開発計画と観光行政

戦後日本の再建のため、政府は昭和

二十五年（一九五〇）に「国土総合開発法」

を制定したが、都道府県で総合開発計画

の先陣を切ったのが富山県であった。昭

和二十七年、「富山県総合開発計画」が

策定された。戦後、観光旅行がさかんに

なるにつれて、富山県や県内各自治体で

も観光開発や地元への観光客誘致の動きが活発化した。

新たな博覧会と観光キャンペーン

昭和五十八年（一九八三）に、「につぼん新世紀博覧会」（会期、七月十六日～九月十五日）が小杉町の県民公園太閤山ランドで開催された。この新世紀博覧会は、豊かなローカル色と獨創性に富んだ前例のないユニークな地方博となった（入場者数一三万六八三二人）。

また、平成四年（一九九二）には、「第一回ジャパンエキスポ富山'92」（会期、七月十日～九月二十七日）が、同じく県民公園太閤山ランドで開催された。この博覧会は、通産省が提唱する

ジャパンエキスポ制度の第一号であり、新しい時代の人間の生き方・地域のあり方・豊かなライフスタイルを世界に



ジャパンエキスポ富山'92の会場風景
（正面ゲート付近）



『富山県総合開発計画』（富山県公文書館蔵）

向けて提唱した（入場者数二三万五八九三人）。産業用ロボット、アルミ産業、YKKのファスナー、ウォータージェット、医薬品産業など富山県が誇る最先端技術を内外に広くアピールする機会となった。また、県内全自治体および世界の国々、友好州省の紹介と交流や、「みんなで語ろう―富山の昭和史―」が開催され、新世紀に向けて過去の歴史に学ぶ姿勢が示された。また、昭和五十八年（一九八三）四月二十五日から八月二十四日の会期中、置県百年記念事業の一環として「いい人 いい味 いきいき富山」をキャッチフレーズとする観光キャンペーンが行われた。富山県の持つ恵まれた観光資源を広く全国に紹介、宣伝することを趣旨とし、観光客の誘致増大と観光の振興が図られた。

四 これからの富山の観光

現在富山県では、「パノラマ キトキト 富山に來られ」をキャッチコピーとした観光キャンペーンを展開している。北陸新幹線開業効果などにより、平成二十七年現在、黒部峡谷鉄道や宇奈月温泉、瑞龍寺をはじめとする県内の主要な観光地の入込数は、前年度に比べて大きく増加した。

平成十八年（二〇〇六）十二月に制定された「観光立国推進基本法」にもとづき、平成二十年（二〇〇八）十月一日に観光庁が設置された。富山県ではそれに加え、同年十二月二十二日に「元気とやま観光振興条例」を制定し、選ばれ続ける観光地 富山―『海のあるスイス』を目指して―をスローガンに、「観光立県」事業を推進している。

①自 然 立山黒部の山岳、富山湾、砺波の散居村など
②食文化 ますの寿司、氷見鱒、しろえび、ほたるいか、紅ズワイガニなど

③産 業 富山のくすり、高岡銅器、井波彫刻などの伝統産業

④歴 史 世界文化遺産「五箇山・相倉合掌造集落」国宝「瑞龍寺」など

⑤伝統文化「越中おわら風の盆」「むぎや祭り」「高岡御車山祭」など

また、海越しの美しく雄大な自然景観を誇る富山湾は、ユネスコ支援の「世界で最も美しい湾クラブ」にも加盟した。このように富山県には、多様な観光資源がある。

また、陸・海・空の交通基盤の整備も進められている。富山県は、東京、大阪、名古屋からほぼ同距離にあり、北陸新幹線の開業で富山―東京間の移動時間は二時間八分に短縮された。「富山きときと空港」

からは、東京、札幌への国内線、ソウル、大連、上海、台北への国際線も就航し、環日本海・東アジアの航空ネットワークも形成されている。

コンパクトな県であるメリットを生かし、県内の観光拠点をつなぎ、ふるさとの魅力・個性を発信する広域的観光が今日、目指されている。



北陸新幹線の開業

おわりに

「観光」といえば一般的には「楽しみを目的とする旅行」を指す場合が多い。本来の観光の語源は『易経』の「国の光を觀る」、つまり「地域の光を觀る」営みのことを指す。その光とは、地域の自然や文化、伝統、産業などを輝かせ、地域住民にとって誇りとなるべきものである。

江戸時代、太平の世が続き街道が整備されると、伊勢神宮や善光寺・身延山や親鸞聖人ゆかりの寺院への寺社参詣や、温泉への湯治の旅などが一般庶民にも普及した。越中でも小川温泉を始め公には開湯前であった鐘釣温泉にも農作業の合間の一時の癒しとして旅したことがわかる。

明治以降は、特に鉄道などの交通整備が進む中、楽しみを求める庶民の旅は一大ブームとなった。富山県でも大正二年（一九一三）の一府八県連合共進会や昭和十一年（一九三六）の日満産業大博覧会、戦後の高岡産業博覧会や富山産業大博覧会などを通じて、県内の名所旧跡のみならず、富山の近代化や復興、産業・文化の発展や観光地を県内外に広くアピールした。これらは大衆を惹きつけ、その時々富山県の「光」を示すイベントであった。

戦後は、高度経済成長期からバブル経済期までは、日本経済の発展とともに経済効果を重視した観光の大衆化が一層進む中、自然破壊などの弊害も生まれた。富山県では立山観光開発が進み、昭和四十六年には立山黒部アルペニールトが全線開通して、年間百万人を超える国内有数の観光地となる一方、自然環境の悪化に対し、マイカー乗り入れ禁止やナチュラリストの配置など自然保護への配慮がなされ、それは今日まで続けられている。

富山県は、豊かな自然景観や食文化、歴史・伝統文化など多様な観光資源に恵まれている。また、高速道路網の整備や北陸新幹線開業により首都圏、関西、中京方面との交通アクセスは一層便利になった。富山きときと空港、伏木富山港からの環日本海・東アジアとの交通ネットワーク整備も進められている。こうしたふるさとの特性を活かし、「観光立県」をめざして、ふるさととの魅力を発信していくことが求められている。

主要参考文献

	書名	編著者	出版年	発行・出版
1	『富山県史』通史編IV近世下	富山県	1983	富山県
2	『富山県史』通史編V近代上	富山県	1981	富山県
3	『富山県史』通史編VI近代下	富山県	1984	富山県
4	『富山県史』通史編VII現代	富山県	1983	富山県
5	『富山県史』史料編VI近代上	富山県	1978	富山県
6	『富山県史』史料編VII近代下	富山県	1982	富山県
7	『富山県史』史料編VIII現代	富山県	1980	富山県
8	『富山地方鉄道五十年史 理念編』	富山地方鉄道株式会社編	1982	富山地方鉄道株式会社
9	『富山地方鉄道五十年史』	富山地方鉄道株式会社編	1983	富山地方鉄道株式会社
10	『とやま近代化ものがたり』	富山近代史研究会編著 高井進監修	1996	北日本新聞社
11	『江戸の旅人たち』	深井甚三	1997	吉川弘文館
12	『越中の文学と風土』	廣瀬誠	1998	桂書房
13	『ふるさと富山歴史館』	深井甚三・米原寛／監修	2001	富山新聞社
14	『歴史と観光－富山近代史の視座－』	富山近代史研究会編	2014	山川出版社
15	『近代日本の地域形成－歴史地理学からのアプローチ－』	山根拓・中西遼太郎編著	2007	海青社
16	『近代ツーリズムと温泉』	関戸明子	2007	ナカニシヤ出版
17	『近代日本の視覚的経験－絵地図と古写真の世界－』	中西遼太郎・関戸明子編著	2008	ナカニシヤ出版
18	『もうひとつの立山信仰』	富山県	1992	富山県【立山博物館】
19	『富山の近代化～町はこうしてつくられた～』	富山市教育委員会	2000	富山市郷土博物館
20	『企画展 街道～越中を行き交う人々～』	富山市教育委員会	2001	富山市郷土博物館
21	『特別展 富山の商店街～近代化のあゆみ～』	富山市教育委員会	2001	富山市郷土博物館
22	『第17回企画展 異人たちが訪れた立山カルデラ－立山新道と外国人登山－』	富山県	2006	立山カルデラ砂防博物館
23	『旅行時代の到来－パノラマ地図と近代大衆旅行－』	滑川市教育委員会	2012	滑川市立博物館
24	「越中魚津町の「侠客」三ヶ屋作兵衛のこと」(『富山史壇』第153号)	浦田正吉	2007	越中史壇会
25	「日本八景」の選定：1920年代の日本におけるメディア・イベントと観光	新田太郎	2010	慶応大学アート・センター
26	平成26年度企画展「とやまの鉄道物語」	富山県公文書館	2014	富山県公文書館

関 連 年 表 (近代以降)

年 号	西 暦	内 容
明治6年	1873	女性初の立山登頂 (深見チエ)
明治8年	1875	外国人初の立山登山 (英国のガウランドとデュロン)。高岡古城公園の指定
明治11年	1878	小杉復堂 (旧富山藩士) 立山登頂
明治18年	1885	富山県米繭糸共進会開催 (富山県初の共進会)
明治26年	1893	日本初の旅行斡旋業者・喜賓会設立。ウエストーンが大町から立山登頂
明治27年	1894	富山市で勸業博覧会開催
明治33年	1900	関西2府15県連合共進会開催 富山県内務部編『越中名勝案内』、浅地倫著『富山案内記』刊行
明治42年	1909	皇太子行啓。石崎光瑤・河合良成ら民間人による剣岳初登頂
大正元年	1912	ジャパン・ツーリスト・ビューロー (現、JTB) 設立
大正2年	1913	北陸線(富直線)、富山ー直江津間開通。1府8県連合共進会開催(堀川村・魚津水族館)。 富山市内電気軌道開業。富山市編『富山市案内』、連合共進会富山県協賛会『富山県案内』、 中部鉄道管理局編『北陸線案内』
大正11年	1922	黒部温泉会社設立
大正12年	1923	黒部鉄道が宇奈月まで開通
昭和2年	1927	大阪毎日新聞社・東京日日新聞社「日本新八景」選定 富山新報社「県下理想的避暑地」選定
昭和3年	1928	富山都市計画事業決定。冠松次郎著『黒部溪谷』刊行
昭和4年	1929	八ヶ山遊園(スキー場、運動公園)の開発。川崎順二、「越中八尾民謡おわら保存会」創設
昭和5年	1930	鉄道省に国際観光局設置。このころから各地で観光対策を担う部署や観光協会が設立される。 小牧ダム完成。富山電気鉄道開業。富山県庁焼失
昭和7年	1932	産業観光富山宣伝会が発足
昭和9年	1934	富山県『観光の富山県』発行。立山・黒部を含む中部山岳地帯が国立公園に指定
昭和10年	1935	新県庁舎、神通川廃川地に竣工。富岩運河完成
昭和11年	1936	日満産業大博覧会開催(富山市)、「富山県観光交通鳥瞰図」発行(吉田初三郎) 宮市大丸富山支店にジャパン・ツーリスト・ビューロー案内所設置
昭和18年	1943	富山地方鉄道(株)設立
昭和21年	1946	富山県観光協会が発足。(昭和31年、富山県観光連盟と改称<会長は県知事>)
昭和26年	1951	高岡産業博覧会開催(高岡市古城公園)
昭和27年	1952	富山県総合開発計画策定。立山開発鉄道(株)設立。第1回となみチューリップフェア開催
昭和29年	1954	富山産業大博覧会開催(富山城址、魚津水族館)。立山ケーブルカー開通(千寿ヶ原ー美女平間) 立山町、観光課設置
昭和30年	1955	富山市で第1回全国チンドン・コンクール開催。魚津埋没林、国特別天然記念物指定
昭和33年	1958	弥陀ヶ原までバス開通
昭和34年	1959	吉田実知事著、『野に山に海に』刊行。富山県経済部に通商観光課設置
昭和35年	1960	高岡御車山、国重要有形民俗文化財に指定
昭和38年	1963	観光基本法制定。黒部第四発電所・黒部ダム完成。富山空港開港
昭和39年	1964	立山黒部貫光(株)設立
昭和43年	1968	富山新港開港
昭和46年	1971	立山黒部アルペンルート全線開通、黒部峡谷鉄道(株)設立
昭和58年	1983	県民公園太閤山ランドオープン。にっぽん新世紀博覧会開催。いきいき富山観光キャンペーン開始
昭和63年	1988	北陸自動車道、全線開通
平成4年	1992	第1回ジャパンエキスポ富山'92開催(太閤山ランド)。海王丸パーク完成
平成5年	1993	初の国際定期航空路線富山ーソウル便就航
平成7年	1995	五箇山の合掌造り集落、ユネスコ世界遺産に登録
平成9年	1997	瑞龍寺、国宝に指定
平成10年	1998	中島閘門修復完了、国重要文化財に指定
平成14年	2002	牛島閘門、国の登録有形文化財に指定
平成18年	2006	富山ライトレール営業開始
平成20年	2008	観光庁設置。東海北陸自動車道全線開通。富山県、元気とやま観光振興条例制定
平成23年	2011	富岩運河環水公園全面開園
平成24年	2012	立山弥陀ヶ原・大日平がラムサール条約に登録。新湊大橋開通
平成27年	2015	北陸新幹線開業、あいの風とやま鉄道開業(3月14日)

年表では企画展の展示物・パンフレットに記載したものを中心に取り上げた。

企画展史資料一覧

	史 資 料 名	所 蔵	実物	パンフ	パネル	ポスター	ちらし
江戸時代の旅	「往来手形之事」	富山県公文書館（広野家文書）	○	○			
	『二十四輩順拝図会 卷之三』	富山県公文書館（佐伯家文書）	○		○		
	「越中国立山之図」	富山県立図書館	○				
	「黒薙温泉図絵」	富山県立図書館	○	○			
	「立山温泉敷地之図」	富山県立図書館	○				
	「小川温泉日記」	富山県公文書館（海内家文書）	○			○	○
	「越中富山神通川船橋之図、名物あいのすし」	富山市売薬資料館		○	○		
	『越中立山参詣記行方言修行金草鞋』	富山県立図書館	○		○		
	「富山城雪解清水 信越境更々越」	富山市郷土博物館			○		
	「越中国立山温泉并新道之図」	富山県立図書館	○				
	「対日本諸国名高大川見立角力」	富山県公文書館（石井家文書）	○				
	「諸国温泉功能鑑」	富山県公文書館（石井家文書）		○	○		
	「越中愛本温泉絵はかき」	個人蔵	○	○			
近代にみる観光の幕開け	「大日本地図明治道中記」	富山県公文書館（荒木家文書）	○				
	「立山附近略図」	富山県公文書館（北野家文書）	○				
	「富山名所」12枚	富山県公文書館（河尻家文書）	○				
	「立山鎮座雄山神社参拝の葉」	個人蔵	○				
	「秩父宮殿下立山御登山一件」	富山県公文書館	○			○	○
	「富山県知事稟申富直鉄道ノ儀二関スル件」	国立公文書館	複製	○			
	『北陸鉄道案内』	富山県立図書館	○				
	「富山電気軌道会社軌道敷設特許権譲渡の件」	国立公文書館	複製				
	「富山案内記 附共進会手引草」	富山市郷土博物館	○				
	一府県連合共進会リーフレット	河尻家文書			○		
	『越中遊覧志』	富山県立図書館	○				
	「八尾案内」	富山県公文書館（北野家文書）	○				
	『日本八景』	富山県立図書館	○		○		
	『富山県下理想的避暑地』	富山県立図書館		○	○		
	「黒部峡谷日本八景八位入選の礼状」	入善町教育委員会（米澤家文書）	○				
	「富山県案内」	富山県公文書館	○				
	「鉄道旅行案内」	富山県公文書館寄託（栢田家文書）			○	○	○
	「越中小川温泉絵葉書」	個人蔵	○				
	「最新実測富山市街図」（大正11年）	富山市郷土博物館	○				
	「富山市を中心とする縣下名勝鳥瞰図」（昭和7）	富山県公文書館（高田家文書）	○			○	○
「御土産品買ヨイ店案内」	富山市郷土博物館	○					
高岡産業博覧会の写真	富山県公文書館			○			
富山産業大博覧会の写真	富山県公文書館			○			
戦後の観光産業の発展	『富山県総合開発計画書 第六編 交通計画』	富山県公文書館	○	○			
	「富山巡り六さん双六」	富山市郷土博物館	○				
	佐伯宗義の写真	富山地方鉄道株式会社			○		
	「北回り新幹線想定図」	富山地方鉄道株式会社			○		
	「立山開発鉄道千丈ヶ原・美女平間鋼索鉄道敷設免許」	国立公文書館	複製				
	「立山へ」	富山県公文書館（北野家文書）	○			○	○
	「富山名所絵はがき」	富山市郷土博物館		○	○		
	「宇奈月温泉と黒部峡谷の探勝」	個人蔵	○				
	『富山県置県百年記念事業報告書』	富山県公文書館	○				
	『新世紀博覧会公式記録』	富山県公文書館	○		○		
	第1回ジャパンエキスポ'92公式記録	富山県公文書館蔵	○	○	○		
	『いい人いい味いきいき富山』	富山県立図書館	○				
	いい人 いい味 いきいき富山 キャンペーングッズ	富山県公文書館	○				
富山からの観光	名勝絵葉書 氷見の風物	個人蔵	○				
	「おわら節戯唄」	富山県公文書館（北野家文書）	○				
	売薬紙風船	個人蔵	○				
	パノラマ キトキト 富山に来られ キャンペーンポスター	富山県公文書館	○				

富山名所（全12枚）

明治42年
（1909）
9月



於保多神社（現：於保多町）



日枝神社・堀川大尉銅像（現：山王町）



光厳寺／大法寺（現：五番町・梅沢町）



停車場（現：牛島町）



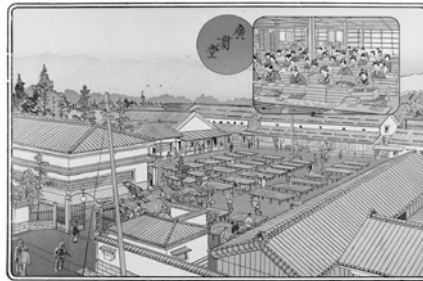
東新地仲ノ丁／稲荷大明神（現：東町・稲荷町）



神通橋 長岡御廟所（現：七軒町・八ヶ山）



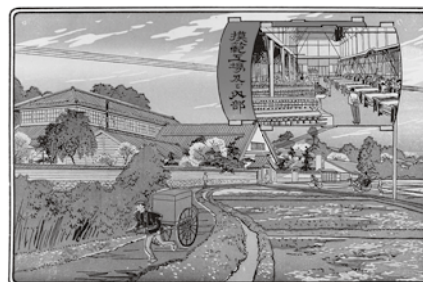
県庁前通り・郵便局（現：大手町）



広貫堂（現：梅沢町）



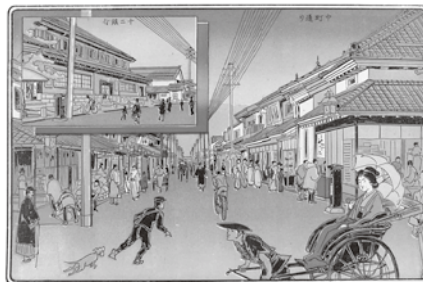
呉羽山／六十九連隊（現：富山大学）



模範工場及び内部（現：大泉町）

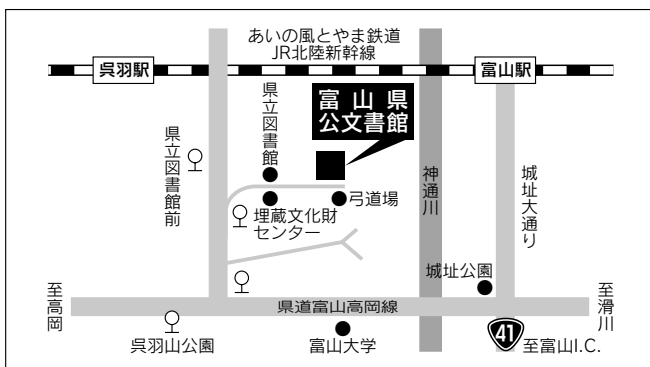


県庁・議事堂（現：富山城址公園）



中町通り・十二銀行（現：中央通り一丁目周辺）

皇太子（後の大正天皇）の富山市への行啓を記念して、明治42年9月に富山市袋町の高見活版所より刊行。多色刷りの石版画全12枚である。
大版画の中に小版画が組み込まれている。江戸時代にはすでに名所であった寺社に加えて、当時の最先端をいく近代的建物や工場なども明治末年頃の富山市の代表的名所として取り上げられている。（河尻家文書 富山県公文書館蔵）



■ 交通機関

- JR富山駅発バス ● 新港東口行〈県立図書館前〉下車徒歩……………3分
 ● 高岡小杉方面行〈呉羽山公園〉下車徒歩……………10分